

国語 試験問題

二月一日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号
氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

あーあ。やる気失^うせた。

しかたなく練習を切り上げて更衣室^{こういしつ}に行くと、もう当然だれもいなかった。でもロビーに向かうと、三人の背中が見えた。

まだいたのかよ。

さっと見えない位置に隠^{かく}れると、信司のぼやく声が聞こえてきた。

「そりや……向井くんはすごいよ。県大会にも余裕^{よゆう}で行けるだろうし、いいアピールになると思う。でも……やっぱりついていけない」

龍之介^{りゅうのすけ}が低い声で言った。

「おれたちは、やっぱり今まで通りのメニューで練習すつからな」

「……向井くんだって、みんなが県大会に行けるように考えてくれてるんだよ」

海人の説得に、龍之介が声を荒^あらげた。

「はあ？ 何あいつの肩持^{かた}つわけ？ どっちの味方なんだよ！」

「味方とか、関係ないだろ」

「海人……おれたちより向井の方が大事なのかよ？ 違^{ちが}うよな？ あいつのタイムが必要なだけなんだろう？」

今すぐこの場から立ちさりしたいのに、体がすくむ。

1 「ああ」

海人の返事に、思わず耳をふさいだ。

これ以上、聞きたくない。

くちびるをかんできびすを返すと、更衣室^{もど}に戻った。

なんだよ、これじゃ……やっぱりビクトリーの時と同じじゃないか。

あいつと泳いだら、違う世界が見えるかもって思ったのに。

海人は、あいつらは、タイムだけが、必要だったんだ。

胸の奥が焼けるように痛い。

しばらくして、もう一度ロビーをのぞくと、みんないなくなっていた。外に出ると、強い海風がふきつけた。

海は、重い雲の色を映して、鉛色に広がっていた。

翌日の土曜日。

何もする気になれず、ふとんの上で寝返りをくり返していると、一階から父さんの声が響いてきた。

「航、友だちが来てるぞー」

……えっ、友だち？

ドキッとして起き上がる。

窓から玄関を見下ろすと、サラサラの黒髪が見えた。

海人!?

しびしび玄関に行くと、父さんがにこやかに海人に話しかけている。

「おはよう」

海人はおれに気づくと、何事もなかったみたいにあいさつしてきた。

無言で、父さんの脇をすり抜けるようにスニーカーをはく。

外に出るとピシッと戸をしめた。

海人は一瞬たじろいだけど、おれの目をまっすぐ見て言った。

「……きのうは、ごめん」

「……は？ なんのこと？」

内心、心臓が鳴りだしたのに気づきながらも、キツイ口調になる。

2 「龍之介と信司に話してみたけど……まだ説得できなくて」

おれは海人の目から視線をそらすと、「別に、もういい」と言った。

自分でも、イヤな態度だなんて思う。

でも……。

きのうの海人を思い出すと、くちびるの裏側をかんだ。いい子ぶりやがって。バレてないと思ってるのかよ。

「今日さ、本当は練習休みだけけど、きのうの分も向井さんと練習しようかと思って」

「……行かない」

「えっ」

「……おれ、もう行かないから！」

海人はしばらくおれを見つめていたけど、「わかった」とひとこと言うと、帰っていった。小さくなる後ろ姿を見ると、なぜか胸がひりひりと痛みだした。

台所へ行くと、母さんの作った目玉焼きを父さんが食卓しょくたくにならべていた。

ウインナーの焼けるにおいがしたが、胃が重い。

「今日、朝ごはん、いいや」

おれが言うと、母さんが「えっ、どうしたの？」とフライパンの火を止めた。

父さんがおれの顔をのぞき込こむ。

「航、あの子、スイミングの友だちだろ？ 何かあったのか？」

「別に……やっぱり、スイミングはやめとく」

父さんと母さんの表情が変わったのに気づかないフリをして、冷蔵庫から牛乳を出してぐびっと飲む。いやなことがあった時、こうするとまるで炭酸飲んだみたいにスカッとする。

でも、今日はただもつと胃が重くなっただけだった。

自分の部屋へ戻り、またふとんの上でゴロゴロしていると、戸がノックされた。

「航、スーパーへ買い物に行くんだけど、ちょっとつきあわないか」

父さんが、買い物？

ことわろうかと思ったけど、このまま家にいると、よけいなことばかり考えてしまいそうだ。

「……行く」

スーパーで食材を買い出しすると、父さんはしばらくだまって車を走らせた。大きな交差点を曲がると、海岸線に出た。

今まで見た中で、一番まぶしい海の光に、目を細める。

海岸線を走っていると、ドリムブルーが近づいてきた。

「そういえば、引越してきた日に、あそこの横断歩道を背泳ぎの格好で渡っている子がいたよな」

「……それがさっきのやつ」

「え、そうだったのか？　もしかして、温泉で背泳ぎが速いって話題になってた子か？　ばあちゃんの友だちの孫の……」

「うん、そう」

そっけなく言う。

「タイムしか知らないけど、航のいいライバルになるんじゃないか？」

は？　ライバル？　海人が？

一瞬、海人とレースをした時の、ぞくぞくして違う世界が見えるような感覚が体をおそってきた。

……いや、もういい。

そんなものを追い求めて、もうがっかりするのはごめん。

っていうか、やっぱりスイミングはやめとくって言ったのに、父さん、聞いてなかったのかよ。

また今までみたいに父さんに口出しされたくない。

信号が赤になり、父さんが車を停めた。

ちようど、初めて海人を見た場所だった。

「さっきの子と、何か……あったのか？」

「……別に」

言う気にはなれない。

父さんは何か言いかけたけど、だまって防波堤ぞいに停車した。

「少し、海でも見るか」

しかたなく降りると、父さんは海を眺めた。

今日もまだ少し風が強く、ブロックに白い波が打ちつけている。

「航、すまん。実は佐渡に引越したのは……ばあちゃんが心配だったのもあるけど、父さんが会社をやめて、佐渡でやり直したくなつたからなんだ」

「えっ」

「会社で働くのが、つらくなつてしまつたんだ。会社の業績が悪くなつてな……上司がたてた実現できないような高い目標を部下につきつけて、達成できなければ給料を低くしたりするのを、止められなかった……。最初はかばおうと思つたけど、そのうち、それが父さんの仕事みたいになつていった」

おれは首をもち上げたけど、父さんの顔をまっすぐ見ることができなかった。

「会社はリストラじゃないって言つてたけど、何人もやめていったよ……。最初は胸が痛んでいたけど、そのうち生き残るためにはしかたない、つて思うようになってな」

おれはごくつとつばを飲むと、父さんの顔をしっかりと見た。

3 「航には、中途半端な時期に引越しを決めて悪かつたけど……」

おれは、精一杯首を横にふるうとしたけど、ぎこちなくなつてしまつた。

父さん……バリバリだつたんじゃないのかよ。

いつも疲れて見えるのは、ただ忙しいからだつて思つてた。

おれ……何も知らなかつた。

「仕事をすぐに見つけないで、何やつてんだつて思つてるかもしれないけど……今度はちゃんと考えたいんだ」
声をしぼり出す父さんに、うなづくことしかできない。

「会社に入った同期で、父さんはトップだった。母さんと航のためにも、ずつといい営業成績をあげ続けて、だれよりも早く昇進するんだつて思つてた」

おれはハツとした。

なんか、おれと父さん……似てる。

当たり前か。ずっと父さんがおれに言い続けてきたんだもんな。

『がんばればできる、一番をめざせ』……つて。

「だけど……会社で一番楽しかった仕事は、新入社員の時に、先輩とみんなで成功させたプロジェクトだつたんだ。あとの二十年は、何をめざしてたんだらうな」

4 父さんはハハッと笑うと空を見た。

おれは、首を大きく横にふった。

「航はやっぱりスイミングクラブに入らないって言ってたけど、本当にもういいのか？」

「……」

スイミングを始めた時、最初は、父さんの期待にこたえなきやって思ってた。

でも、いつの間にか、泳ぐことに夢中になってた。

海に目を向けると、大きな波がはじけて、水の中にいる感覚がよみがえる。

想像の中で、手は勝手に水をかき始め、体がなめらかに水にのった。

やっぱり……泳ぎたい。

でも、今のままじゃ……。

「おれ、どうしたらいいんだろ」

かすれた声でつぶやくと、父さんが首をかしげた。

「みんなで新潟の県大会に行きたいって目標を決めたから、練習量を増やそうって提案したんだ。でも、信司ってやつがっ

5 いてこれなくて、龍之介^{こがし}ってやつがキレて……。二人も一緒^{いっしょ}に県大会に行くために考えたのに……」

うつむいて拳^{こぶし}を握る。

「また、泳ぎたいけど……これじゃ、おれ、ビクトリーの時と変わらない」

父さんは静かに言った。

「そうかな。違うんじゃないか」

「えっ」

「航、ビクトリーの時は、友だちの話をしてタイムのことしか言っていなかっただろ」

思わず顔を上げる。

「でも、今は、みんなのことも考えてるじゃないか……ちょっとは」

「ちよっとって」

「変わらない、って言ってるってことは、



父さんがニヤリとした。

「さて、帰って昼ごはんでも作るか」

「父さんが作るの？」

「ああ。母さんもばあちゃんも仕事をがんばってるんだから、これくらいしなないとな」

車に戻り、父さんが発車させると、道路をはさんで向かい側の歩道を海人が歩いているのが見えた。

「……海人？」

信号が青に変わってしまった、車が海人を追い越していく。

思わず窓を開けて、後方に目を向け、海人の姿を確かめる。

「どうした？ 車、停めるか？」

父さんに聞かれたけど、返事ができない。

海人はプールバッグを持っていて、髪がぬれているように見える。

一人で……練習してたんだ。

「航、だれかいたのか？」

「あ……いや……朝、うちに来た海人ってやつが」

海人のことだから、きつとみんなも誘さそったんだろう。

でも、龍之介も信司も来なかったんだ。

「海人くん、ドリームブルーに行ってたんじゃないのか？」

父さんの言葉に首をふる。

「……知らない」

父さんが車を停めると、おだやかに言った。

「航、もうちょっとだけ、自分から手を伸ばしてみれば」

は？ おれから……？

ずっと握っていた拳を開いて、自分の指先を見る。

おれから、つてどうすればいいんだ。

「水泳だって、最初はおぼれそうになってもがいていたけど、手を伸ばし続けたから、泳げるようになったんだよな」
泳ぐように……手を伸ばす？

「ビクトリーの時は、一人でがんばってたみたいだけど、あんなふうに来てくれる子、いなかったんじゃないのか？」
くちびるをかむ。

海人の背中がどンドン小さくなる。

「一人で勝つのは、すごい。でも、みんなで勝つのは、強いぞ」

強い……？

父さんがニツと笑った。

「ちよつと、行ってくる。父さんは、帰ってて」

おれは車のドアを開けると、海人に向かつて駆け出した。

(注) *ビクトリー……航が所属していた東京の強豪スイミングクラブ。

*ドリームブルー……佐渡唯一の温水プール施設。航たちの主な練習場所。

(高田由紀子『スイマー』による)

1. ——— 線部1「海人の返事に、思わず耳をふさいだ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 航がこのような行動をとった理由を説明した次の文の□にあてはまることばを考え、三十五字以内で答えなさい。

信司や龍之介に対する海人の返事から、□ため、これ以上聞きたくないと思ったから。

(2) このときの航の心情を象徴的に表している部分を二文ひとつづきで探し、初めの五字を抜き出さなさい。

2. ——— 線部2に「おれは海人の……言った」とありますが、航がこのような態度をとった理由として最も適当なものを
選び、符号で答えなさい。

ア 龍之介と信司に同意していた海人がまだ二人を説得できていないことだけを謝ったことにあきれているから。

イ 突然自宅までやってきた海人の、一方的に謝罪し水に流そうという態度に不信感を抱いているから。

ウ 誰にでもいい子ぶる海人が航の父を味方につけようとする姿を見て、とても許す気にはなれなかったから。

エ 昨日のことがなかったかのように、あいさつをしたり談笑したりしている海人の態度に怒りを覚えたから。

3. ——— 線部3に「おれは、精一杯……ぎこちなくなつてしまった」・——— 線部4に「おれは、首を大きく横にふつた」とありますが、——— 線部3から——— 線部4にかけての父親に対する航の心情の変化を説明した、次の文章の I へ

III にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

佐渡に引つ越した本当の理由を打ち明けて謝罪する父を目の当たりにし、 I。しかし、父の話を聞いているうちに II という共通点を父と自分に見出し、 III。

I

- ア 今まで本音を明かしてくれなかった父に怒りを覚えていた
- イ 自分の思い描いていた父の姿との違いに戸惑っていた
- ウ 何も知らずに父と接してきた自分を恥ずかしく思っていた
- エ 仕事を投げ出してしまった父にがっかりしていた

II

- ア 自分勝手な思い込みで仲間を見捨てていた
- イ 自分の弱さから真実を隠そうとしていた
- ウ 楽しむことを忘れて結果を出すことを優先していた
- エ 言い訳ばかりして自分の失敗を認めなかった

III

- ア 過去の自分を否定的に語る父に寄り添おうとしている
- イ 父と自分の愚かさを改めて思い知り反省しようとしている
- ウ これまで以上に父を偉大な存在として感じている
- エ 父を責める資格は自分にはないと思ひ直している

4. ———線部5に「うつむいて拳を握る」とありますが、このときの航の心情を説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア みんなで決めた目標に向かって頑張ったが、チームメイトの理解を得られず、やるせなさや悔しさを募らせている。
イ 自分を変えようと努力してきたが、その変化を父に認めてもらえないことに切なさや悔しさを感じている。

ウ 県大会に進出するために頑張ってきたが、このままでは父の期待に応えられないという焦りと悔しさを感じている。
エ みんなのために泳ぎつづけてきたが、自分勝手なチームメイトを思い出して、いらだちや悔しさを募らせている。

5. ———線部6に「海人に向かって駆け出した」とありますが、このときの航について説明したものとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 父からの助言により、チームとして目標を達成することの難しさを知り、これまではたよりにならないと考えていた友だちをたよろうとしている。

イ 父から仲間に手を差し伸べることを提案され、これ以上衝突したり裏切られたりすることをさけるために、海人の気持ちを確かめようとしている。

ウ 父との会話から、仲間と協力して何かを成し遂げることの価値に気づき、これまでのように一人でなやむのではなく、自らチームメイトに歩み寄ろうとしている。

エ 尊敬していた父の弱さにふれ、仲間のために何もできなかった父のようになることをおそれ、自分が距離を置こうとしたチームメイトに再び手を差し伸べようとしている。

6. にあてはまることばとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 変わることをためらってることだろ

イ 変わるかもって期待してることだろ

ウ 変わらないってあきらめてることだろ

エ 変わりたいって思ってるってことだろ

7. この文章の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。
- ア 航と父親の短い会話のやり取りによって、親子関係のぎこちなさが浮き彫りになっている。
 - イ 航の視点で物語をすすめることによって、航の心情が読者にわかりやすく描かれている。
 - ウ 航と父親の心情を対照的に描くことによって、航の感じている孤独感が際立っている。
 - エ 航のセリフに「……」を多用することによって、優柔不断な航の性格が強調されている。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

他の植物たちと生育する場所をずらすことで、密を避けて^さいる植物がいます。昆虫などの小さな動物を捕らえて、栄養を吸収する植物たちで、これらは「食虫植物」といわれます。ですから、「食虫植物は、虫を食べるといって、狩猛な生き物である」と考えられがちです。A、食虫植物には、生き残るために、昆虫を食べざるを得ない事情があったのです。食虫植物として人気者のハエトリグサを例に、昆虫を食べるのもやむを得なかった事情を紹介^{しょうかい}します。この植物はモウセンゴケ科に属し、原産地は北アメリカです。「ハエトリソウ」や「ハエジゴク」などの名前で、園芸店などで販売^{はんばい}されることもあります。

この植物の葉っぱは、二枚貝が開いたような状態で向き合っています。二枚の葉っぱのまわりには、トゲがいっぱい生えています。一枚の葉の中には三本のトゲのような「感覚毛」とよばれる毛があります。ハエなどの虫がこの毛に触れると、二枚の葉がピタンと合わさるようにすばやく閉じて、葉と葉の間に閉じ込めてしまいます。この葉は、「捕虫葉」とよばれます。

多くの植物は、光合成によつて、生きるためのエネルギーや成長のための栄養を得ています。それに対し、食虫植物は「虫を捕らえて、食べて栄養としている」といわれます。そのため、「食虫植物は、光合成をしない」と思われがちです。

しかし、そうではありません。ハエトリグサは、いかにも動物のように生きていくという印象がありますが、この植物は、ふつうの植物と同じように、光合成のための光を吸収する色素である、緑色のクロロフィルをもっています。ですから、食虫植物は光合成を行います。「食虫植物は、虫を食べるから、光合成をしない」というのは、誤解なのです。

食虫植物であるハエトリグサは、光合成を行いますから、日当たりの良い場所を好んで生活します。この植物は、「虫から栄養を得る」と思われていても、十分な光と水があれば、光合成をします。

ですから、成長や生きるためのエネルギーとなるデンプンは、自分でつくることができます。そのため、光合成でつくることができるデンプンを求めてはいません。それなら、「なぜ、虫を捕らえて食べるのか」という疑問がおこります。

実は、ハエトリグサが虫から手に入れているのは、タンパク質などの窒素を含んだ物質です。植物が生きていくために必要なタンパク質やクロロフィル、遺伝子などをつくるためには、窒素が必要なのです。

ハエトリグサは、タンパク質などをつくるために必要な窒素を、虫から取り入れる方法を見つけました。ちなみにこの

方法は、そんなに突拍子もないものではありません。私たち人間も、窒素を含むタンパク質などの栄養を、ウシやブタ、ニワトリや魚の肉から取っています。

ふつうの植物は、窒素を含んだ養分を、土の中から吸収します。そのため、私たちが植物を栽培するときには、土の中に不足しがちな窒素、リン酸、カリウムを三大肥料として、土に与えます。

では、「なぜ、ハエトリグサは、根から窒素を含んだ養分を吸収しないのか」という疑問が浮かびます。

実は、この植物の原産地は、北アメリカの窒素の養分をあまり含まない痩せた土地なのです。B、ハエトリグサは、土の中から窒素という養分を十分に吸収できません。そこで「虫のからだから、窒素を含んだ物質を取り込む」という能力を身につけたのです。そうすることで、肥沃でない土地にでも生きていけるようになったのです。

ふつうの植物は、そのような養分が乏しく痩せた土地では生きていけません。ですから、「そんなしくみを身につけてまで、肥沃でもない土地に生きる利点はあるのか」との疑問が残ります。

その答えが、他の植物と密になつて育つことを避けることなのです。ハエトリグサは虫を捕らえ、虫から窒素を含むタンパク質を摂取する方法を身につけることによって、決して密にはならない自分だけの生育地を確保したのです。

「虫を食べて、窒素を含む栄養を取り込む」という能力を身につければ、生育地を奪い合う競争をせずに他の植物たちが育つことができない土地で、密にならずに、生きていくことができます。

「必要は、発明の母」ということわざがあります。発明正といわれる、トーマス・エジソン（一八四七～一九三一）の言葉といわれることがあります。でも、ほんとうは、もう少し古く、一七二六年に、イギリスの小説家、ジョナサン・スウィフトが出版した『ガリバー旅行記』の中に出てきたものとされます。

ハエトリグサは、もつと古くから生きているでしょうから、このことわざを知っていたはずはありません。しかし、ハエトリグサのもつ、虫を捕らえる捕虫葉は、このことわざの一つの例といえるでしょう。

ハエトリグサ以外にも、成長するための養分があまり含まれていない、肥沃でない土地に、積極的に自給自足で暮らしてきた植物があります。この植物については、次項で紹介いたします。

「緑肥作物の代表」といわれる植物があります。レンゲソウです。植物の葉っぱや茎などの緑の部分が、土に埋め込まれて肥料となるものを「緑肥」といい、緑肥として使われる植物は「緑肥作物」とよばれます。長い間、レンゲソウは、「緑肥作物の代表」として利用されてきました。

「なぜ、レンゲソウが、緑肥作物の代表なのか」との疑問が浮かびます。レンゲ畑に元気に育つレンゲソウの根を土からそ

1. A ⊂ C に入ることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア なぜなら イ しかし ウ たとえば エ そのため

2. ——— 線部1「食虫植物」について説明した次の文の I ⊂ IV にあてはまることばをそれぞれ指定字数で抜き出しなさい。

食虫植物は I (八字) ため、 II (三字) をしない植物であると思われるが、光を吸収する III (六字) という色素を持っており、成長や生きるための栄養素である IV (四字) を、^{いっばん}一般の植物と同様に II を行うことで自ら作り出すことが可能である。

3. ——— 線部2に「なぜ、虫を捕らえて食べるのか」とありますが、その理由を説明した次の文の I ⊂ III にあてはまることばをそれぞれ指定字数で抜き出しなさい。

多くの植物は、生きていくために必要となる I (二字) を含んだ養分を土の中から吸収しているが、北アメリカの II (七字) で生きているハエトリグサは、 III (一字) を通じて十分な養分を得ることができないから。

4. 「ハエトリグサ」が養分の乏しい土地に生息する利点を説明している部分を「⌋ということ」につづくように五十四字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

5. ——— 線部3に「この根粒菌がすばらしいはたらきをする」とありますが、具体的にはどのようなはたらきですか。「⌋はたらき」につづくように十五字で探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。

